



### 生島 美紀子

ヴェールを取り払うと、眩い黄金が現れる——まるでフェアリーテール(おとぎ話)のようなが、日本音楽史にはそんな人物が美在した。大澤壽人(1906〜53年)という、神戸出身の作曲家である。わずか47年の生涯に、ボストン・パリに留学して国際的なキャリアを築き、多岐のジャンルに渡って千近い作品を創作した。

明治39年生まれである大澤の青年期は、琴や三味線、芝居小屋や活動写真館の時代。洋楽の、しかも作曲を志す人は限られていた。日本最初期の洋楽作曲家として私たちが思い浮かぶのは、先人の滝廉太郎(1879〜1903年)

## 幻の天才 大澤壽人の音楽遺産—春の名曲

# 来月13日、音楽家緊急支援コンサート

か、山田耕筰(1886〜1965年)くらいだ。

1930年に渡航した大澤は、才能が一挙に開花。大成功を土産に36年に帰国したが、数日後に二・二六事件が



大澤壽人©神戸女学院「大澤壽人遺作コレクション」

勃発。国は太平洋戦争へ向かっていった。当時の楽壇は、世界一流のボストン交響楽団を指揮し、パリデビューを自作自演で飾るなど、大澤の「邦人初」の偉業と世界的な実力を評価できないまま、本人が戦後8年で急逝。以来、半世紀以上も忘れ去られた「幻の作曲家」になってしまった。だが奇跡は起こった。スクープ記事やCDリリースによって、「平成の復活劇」と言えるブームが到来。大澤家の

「幻の天才 大澤壽人の音楽遺産」のチラシ

2022年 3.13 SUN

13時15分 開演 / 14時30分 開演あり  
入場料: 3,500円(全席自由) 松方ホール友の会 3,000円  
会場: 神戸新聞 松方ホール

蔵に眠っていた遺品の調査が進み、遂に活動の全貌が現れた。作品総数は予想の10倍以上、交響大作が次々と発見されて、煌めくばかりの足跡。作曲家界の黎明期に、これほどの大スターがいたと驚きをもって受け止められた。

ユーターで浄書。ここまで行くと、ようやくアーティストに演奏の依頼ができる。どの過程にも時間を要して遣り甲斐と苦労が紙一重になるが、まだまだある大澤の作品を埋まらせてはならないと突き進む。

「春」にちなんで、今回は「春」にちなんで作品を選んで紹介する。パリの聴衆を魅了した《桜に寄す》や、名ピアノリストが神戸海員会館で初演した《丁丑春三題》から、ラジオ放送で人気を呼んだホームソング《春の南京町》まで、独唱や合唱、ピアノやヴァイオリンの作品がずらりと並ぶ。また、編曲の名手だった大澤の一面も、西洋の名曲、シューベルトの《聞け、青空にいるひばりを》やメンデルスゾーンの《春の歌》で楽しめる企画で、生涯や作品についてたっぷり解説された10ヶ超のプログラム冊子が配布される。

しかし残念なことに音楽は、聴く機会がなければ黄金の眩しさも理解が難しい。そこで「大澤資料プロジェクト」による普及運動が始まった。中心となるのはコンサート主催である。各ジャンルの代表作を演奏し、作曲家の「個展」を開く。この17年に2、3年毎のペースで開き、顧みられなかった作品の初演や復活演奏を行ってきた。

いよいよ迎える本番の日。3月13日午後2時から、神戸の松方ホール(JR神戸駅、市営地下鉄ハーバーランド駅から徒歩約10分)で、レクチャー付きコンサート「幻の天才 大澤壽人の音楽遺産—春の名曲」開催となった。

今も瑞々しい生命を保つ大澤壽人の世界。この貴重な「音楽遺産」に是非一度、耳を傾けていただきたいと心から願っている。

とはいえ既に没後70年近く、留学からは90年を越えた現在、当時の作品の演奏は「筋縄では行かない。開催までには、手稿譜の誤記や判読不明箇所を校訂した上で、現代の記譜法に書き改め、コンピ

「和魂洋才」、戦後は進駐軍からのジャズを取り込んだんだ「ウルトラモダン」、帰国後は洗練の極みをみせる「上質のセミクラシック」。

色とりどりの音の響きが、天賦の才を物語っている。 (こうした多彩な作品の中から)

「大澤資料プロジェクト代表、神戸女学院大学非常勤講師」

入場料3500円、問い合わせは078(362)7191同ホールチケットセンター。

「大澤資料プロジェクト代表、神戸女学院大学非常勤講師」